

# 自閉性障害を持つ子どもの学童期の家族支援

社会福祉法人 水仙福祉会・風の子そだち園 松村 昌子  
社会福祉法人 水仙福祉会・淡路こども園 岩崎 隆彦

## 要 旨

地域生活支援システムの構築が検討されている現在、従来十分でなかった学童期の家族支援の必要性について述べたい。特に自閉性障害を持つ子どもの場合、本人の立場に立ち発達に見合った対応がなされないと、問題行動が激しくなり、家庭での生活が次第に困難になっていく。本稿では、幼児期、学童期、成人期を通して、本人や家族を長年支援してきた実践をもとに、学童期の難しさとその背景を明らかにしつつ、地域で当たり前の生活を送るための家族援助について検討した。本人への具体的援助と同時に、本人の問題行動をどう理解するか、学校との関係調整、家族関係を整える援助などを含む、相談活動の重要性を強調したい。 **Key words**：学童期 自閉性障害、家族支援

## ．はじめに

これまでの障害児者に対する福祉や教育は、障害を持つ本人だけを家族から切り離して、障害そのものを改善したり克服することを目指した指導、訓練が中心であった。そのため、本人が地域で当たり前の生活をしていくために必要な、共に暮らす家族との関係を大切にしたい支援、言い換えれば、障害児がいることによって家族が抱える悩みや困難に対する相談、援助が欠けていたと思われる。

また、子どもの成長を支えるためには、発達に応じた援助を積み重ねてゆくことこそ重要である。しかし、現状では、早期発見、早期療育によって取り組まれてきた幼児期の課題は、必ずしも学童期に引き継がれない。幼児期、学童期、青年・成人期の援助は、相互に有機的なつながりを持つことなく、個々ばらばらに取り組まれている。

学童期は、幼児期から持ち越された問題に加え、新たに学校との関係で生じる問題と相まって、子どもの身体の成長が著しいため、本人の状況が難しくなり、家族がだんだん疲弊し崩壊する危険性をはらんでいる。そうした中で、ようやく学童期における地域生活支援のあり方に目が向けられるようになってきた。従来の学校教育でカバーできない部分、例えば、放課後や夏休みの学童保育、余暇活動、レスパイトサービス、ショートステイなどのサービスを実施する所が出始めている。この動向は注目すべきであるが、取り組みはまだ始まったばかりで、学童期の家族が抱える問題の実態を把握し、なぜそのような困難が出てくるか等、その原因や背景を踏まえた支援体制を整えるまでに至っていない。

著者らは、保育所での障害児保育（1970年）から出発して、知的障害児通園施設（78年）、次いで知的障害者通所更生施設（86年）、福祉作業センター（92年）、グループホーム（95年）等の運営に携わり、障害を持つ本人、及び家族の相談、支援を、幼児期から学童期、成人期を通して30年近く継続してきた。本稿では、そうした実践や経験から見てきたものをもとに、学童期の難しさとその背景を明らかにし、地域で当たり前の生活を送るためには、どんな家族援助が必要かを検討する。（続く、全13頁）

## 以下目次

- ．はじめに
- ．学童期の難しさとその背景
- ．学童期の家族をどう支えるか
- ．おわりに